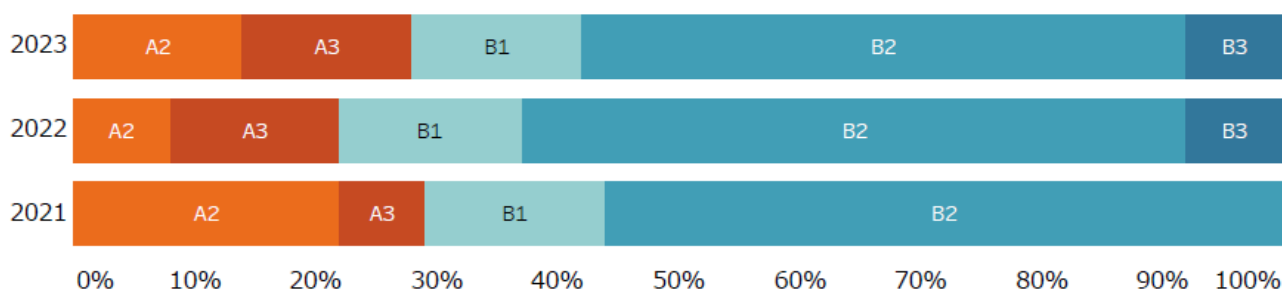


2023年 慶應義塾普通部 算数

過去3年の思考コード別出題割合は次のようになります。高度な思考力が求められるB2、B3の問題が全体の5割以上となり、2022年とほぼ同じ難度と感じました。問題難度を考慮すると、試験時間40分はかなり短く感じると思います。そのため、時間をかけるべき問題を見極めて取り組む必要があります。また、普通部で頻出の分野（平面図形、旅人算、比を利用する文章問題、調べる問題、…など）については、十分な対策は欠かせません。同じ慶應の付属であっても、A、B1レベルの問題が中心となる中等部に比べると、B1～B3レベルの問題が多数となるため難度は高くなりますが、試験時間40分を最大限有効に使うためには、中等部と同様に、素早く正確な処理能力は必須です。



大問1の計算は、手間がかかりますが、確実に処理をします。②は、 $2023 = 7 \times 17 \times 17$ に着目します。大問2は情報を読み取って整理する問題でした。②で差がついたと思います。線分図などの図に置き換えて、割合を整理していきます。大問3は、五角形に並べた基石を規則通りに並べ変える問題でした。1辺に並ぶ基石の数が5個、6個、…10個までと、11個、12個、…では余る基石の個数の増え方に違いがあります。落ち着いて調べて規則を見つけ、およその個数を絞り込めたかどうかで②は差がついたと思います。

大問4は、立方体から円柱、直方体をくり抜く問題でした。体積は求められても、表面積で手が止まった受験生が多かったと思います。円柱と直方体の底面が重なる部分を正確に具体化できたかで差がつかれました。大問5は、直角三角形からの切り抜きの問題でした。ここは、落ち着いて得点しておきたい問題です。大問6は、手も足も出なかった受験生も多かったと思います。 $AD = BE$ となる点に注目して、対角線CGとCFも引いてみると、二等辺三角形CFGができることがわかります。方針が立たなければ、後回しにしてよい問題です。大問7は、典型的な隔たりグラフの問題でした。多くの受験生が一度は触れたことのある問題となります。グラフの特徴的な部分に注目する、2人の動きをダイヤグラムに置き換えるなどして、確実に得点しておきたいです。大問8は、場合の数でした。9つのマスに○をかき、何通りあるか調べます。似たような問題が2021年の桜蔭で出題されています。ていねいに場合分けして調べる必要があるため、かなり手間がかかります。実際の試験では見送って、他の問題を確実に得点する方がよいと思います。

試験時間40分で高度な思考力が求められる問題を解き進めていくため、かなりハードです。取れる問題を確実に取っていきます。あくまでも予想ですが、大問2②、大問4②、大問6、大問8を落としたりとしても、およそ7割程度には達することができると思います。